

# 本学保育科における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけに関する考察

大野 地平・寺田 博行・海老江 康二・宮本 茂樹

本研究の目的は、保育実習Ⅰ（施設）が本学保育科の保育士養成課程の中で、どのような位置づけがなされるべきであるかを考察することにある。

検討にあたっては、まず、はじめに厚生労働省が示す指針等に基づいて保育士養成課程における保育実習Ⅰ（施設）の概要について整理した。その上で保育科における保育実習Ⅰ（施設）の事前・事後指導のあり方について検討し、最後に保育科における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけについて明らかにした。

その結果、人と関わるということはどのようなことであるかを考える基礎的実習として、本学保育科の保育士養成課程の中に保育実習Ⅰ（施設）を位置づける必要があることを明らかにし、その概念図を提示することができた。

キーワード：保育実習Ⅰ（施設）、保育者養成

## 1 はじめに

本研究の目的は、本学保育科における保育実習Ⅰ（施設）の事前・事後指導の検討を通して、保育実習Ⅰ（施設）が保育科の保育士養成課程の中で、どのような位置づけがなされるべきであるかを考察することにある。

保育士資格を取得するためには、保育実習Ⅰ（施設）、保育実習Ⅰ（保育所）、保育実習Ⅱ（保育所）または保育実習Ⅲ（施設）の各実習が必修である。保育科では保育実習Ⅰ（施設）を1年次の2～3月に、保育実習Ⅰ（保育所）を2年次の5月に、保育実習Ⅱ（保育所）または保育実習Ⅲ（施設）を2年次の8～9月に実施している。このことから分かるように保育科では保育士資格を取得するための最初の実習が保育実習Ⅰ（施設）、すなわち施設実習である。しかし、保育士資格を取得するために、施設実習が必修であるということ、入学する以前に認知している学生は少なく、入学後、初めて施設実習が必要であるということを知る学生も多い。また、施設に就職し、保育士資格を活かすという学生は少ない。このことから、保育士資格を取得するための最初の実習である施設実習の必要性を学内において、いかに指導するか、何を指導するかが課題となっている。

このような問題意識から本研究では、先行研究の成果を踏まえつつ、保育実習Ⅰ（施設）が保育科の保育士養成課程の中で、どのような位置づけがなされるべきであるかについて検討することにした。検討にあたっては、まず、はじめに厚生労働省が示す指針等に基づいて保育士養成課程における保育実習Ⅰ（施設）の概要について整理する。次に保育科における保育実習Ⅰ（施設）の事前・事後指導の

あり方について検討する。最後に保育科における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけについて検討し、次年度の実習指導に向けての改善点を明らかにすることにしたい。

## 2 先行研究

本研究の先行研究としては、本研究と同様の筆者達で2008年に「聖徳の教えを育む技法」で発表した「保育士養成における施設養護実習の現状と課題－知的障害者入所更生施設での実習から」を含めた8本の論文がある。これらの論文は、施設ごとの実習のあり方について学生へのアンケートを中心に、その意識をまとめたものである。その中で、各実習先において、実習生は利用児者とのコミュニケーションを学びの主眼としていることが明確となり、その指導がいかにあるべきかを論じた。また、第一回日本保育者養成教育学会研究大会においては、村田らによる「施設実習における学生の学びに関する研究」<sup>注1</sup>という発表において、施設実習が保育所実習前に行われることで、関わることへの考え方が深まる旨が発表されている。

## 3 保育士養成課程における保育実習Ⅰ（施設）の実際

厚生労働省雇用均等・児童家庭局長による「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」（雇児発0331第29号）の別紙2によれば、「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」とされ、その履修方法については表1のとおり示さ

れている。

表1 保育実習実施基準 履修の方法

実習種別 (第1欄)	履修方法(第2欄)		実習施設 (第3欄)
	単位数	実習施設におけるおおむねの実習日数	
保育実習Ⅰ (必修科目)	4単位	20日	(A)
保育実習Ⅱ (選択必修科目)	2	10日	(B)
保育実習Ⅲ (選択必修科目)	2	10日	(C)

備考1 第3欄に掲げる実習施設の種別は、次によるものであること。

- (A) …保育所、幼保連携型認定こども園又は児童福祉法第6条の3第10項の小規模保育事業(ただし、「家庭的保育事業等の設備及び運営に関する基準」(平成26年厚生労働省令第61号)第3章第2節に規定する小規模保育事業A型及び同基準同章第3節に規定する小規模保育B型に限る)若しくは同条第12項の事業所内保育事業であって同法第34条の15第1項の事業及び同法同条第2項の認可を受けたもの(以下「小規模保育A・B型及び事業所内保育事業」という。)及び乳児院、母子生活支援施設、障害児入所施設、児童発達支援センター(児童発達支援及び医療型児童発達支援を行うものに限る)、障害者支援施設、指定障害福祉サービス事業所(生活介護、自立訓練、就労移行支援又は就労継続支援を行うものに限る)、児童養護施設、情緒障害児短期治療施設、児童自立支援施設、児童相談所一時保護施設又は独立行政法人国立重度知的障害者総合施設のぞみの園
- (B) …保育所又は幼保連携型認定こども園或いは小規模保育A・B型及び事業所内保育事業
- (C) …児童厚生施設又は児童発達支援センターその他社会福祉関係諸法令の規定に基づき設置されている施設であって保育実習を行う施設として適当と認められるもの(保育所及び幼保連携型認定こども園並びに小規模保育A・B型及び事業所内保育事業は除く。)

保育士資格を取得するためには、保育実習Ⅰ(4単位)とともに、保育実習Ⅱ(2単位)または保育実習Ⅲ(2単位)のいずれか一方の実習が選択必修である。保育実習Ⅰの4単位については、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長による「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準につい

て」(雇発0331第29号)の別添1に示されているように、保育所での実習2単位、施設での実習2単位からなる。

保育科では、厚生労働省が示す基準を踏まえ、保育実習Ⅰ(施設)の実習日数については11日間(90時間)とし、1年次の2～3月に実施している。なお、実習日数については、『厚生労働省関東信越厚生局「指定保育士養成施設関係」会議資料[平成18年度第2回連絡会議]』の中で、「保育実習に係る実習時間の状況を見ると、『保育実習Ⅰ』は20日間の160時間、また、保育実習Ⅱ及びⅢは10日間の80時間に止まっていることが認められたが、この取扱いは学則に定める各保育実習の時間数を満たしておらず、十分とは言えない時間数であるので、今後、各実習施設と調整の上、遅くとも平成20年度から実施する『保育実習Ⅰ』は22日間、また、『保育実習Ⅱ及びⅢ』は11日間の実習を目安に実施すること」と述べられていることを踏まえた上での設定である。実習は、施設の特質、実習時期、学生の学修進度を勘案し、児童養護施設、母子生活支援施設、福祉型障害児入所施設、医療型障害児入所施設、福祉型児童発達支援センター、医療型児童発達支援センター、障害者支援施設で実施している。

#### 4 保育科における保育実習Ⅰ(施設)事前指導の概要

まず基本的な考え方について「実習の手引き」において、『本学は教育の柱に「人間教育・和の精神」を掲げている。本実習は、個々人が現在学んでいる保育、福祉の一般的知識、理論、技術のみならず、保育士養成を超えた「ソーシャルワーク的な視点からの生活支援」を学び、結果として他者との関わりの中で自身の人間性を高めることも大きな目的である。従って、この実習では、施設における保育士としての基本的考え方、態度、構えにとどまらず、実習を通じての自身の変化を見つめるなど、幅広く積極的に学ぼう、努めることが大切である。』と書かれている。

実際の学内での指導は、事前指導が各90分で5回、事後指導は3回である、なお実習期間中に1回の訪問指導がある。

学生のクラス分けは、実習先の種別毎とし、人数が50人を超えないようにしている。平成28年度は、障害者支援施設が4クラス(各32、33、33、34人)、児童養護・母子生活支援2クラス(各45人)、医療型障害児入所施設1クラス20人であった。

指導内容は、第1回は「施設実習への心構え」として、服装や挨拶の大切さ、さらに報告、連絡、相談等を説明、

次いでロールプレイによる「施設職員との関係」「利用児(者)との関係」について体験的に理解を促す。第2回は「実習先種別による特徴とポイント」として、表2～4に示したように、実習種別ごとに、教科書と配布資料を用いて、初めて出会う各施設の内容と学ぶべき事柄を示す。第3回「実習記録のポイント①：実習の目標と課題」、と第4回「実習記録のポイント②：テーマ・振り返りと考察」とで、記録することの意義と日々の目標設定について考えてもらう。第5回は「施設実習前および実習中さらに実習後の健康管理、保育士としての倫理の重要性」である。

なお、『実習の手引き』は、保育科で作成したもののうち平成28年度入学生用、教科書は株式会社みらいの『四訂版 福祉施設実習ハンドブック』である。

我々の、これまでの検討から施設側の行う評価票から数値的には明らかとなっていないが<sup>注2</sup>、学生へのアンケートによれば注2、実習録の記載特に「考察」の部分が課題となっている。事前指導の第4回の内容にあたるもので、DVDを視聴させたり、ある場面を文章で紹介して、6W1H(いつ、どこで、誰が、誰に、何を、なぜ、どのように行ったのか)を正確に記録し、次に考え、自分の頭を使い、その内容を文章として記録できるように指導しているが、現時点での最大の課題である。

表3 事前指導2回目指導案(医療型障害児入所施設)

平成28年度 保育実習Ⅰ(施設)事前指導2回目  
《実習先種別における特徴とポイント(医療型障害児支援施設)》

目的	実習施設の概要をおさえた上で、施設の目的・支援における保育士の役割を学び、実習施設の概要を理解する。また、実習前にやるべきことについて把握する。	
内容	配布資料とテキストを用いて実習施設の概要について説明する。ワークシートへの記入やグループでの話し合いを通して実習施設における実習のイメージをつかむ。	
時間	具体的な学習内容	働きかけ等
5分	・出席の確認を受ける。 ・服装、髪型・持ち物(前回施設実習録)について点検を受ける。 ・本時の学習内容	・本時の目的・内容を的確に伝える。 ・資料配布
5分 55分	(1)説明及びワークシート記入。 配布資料と教科書を用いて実習施設の概要を説明し、適宜ワークシートの6項目について各自記入する。	・2～3人のグループにわかれて着席する(同施設同士)。 ・ワークシートの記入については適宜助言する。
20分 (10分)	(2)グループワーク。 ①学んだことおよび考えたことを施設ごとに話し合う(2～3人)。 ・後半の3項目「保育士の役割とは何か」、「実習で学びたいことは何か」、「事前にやるべきこと何か」を質問項目とし、聞いたことをメモする。 グループで紹介。 ②まとめの話し合い(全体)。 ・各施設ごとに上記項目について発表する。	・教員が司会進行し話し合いを進め、実習種別への関心が高まるように助言する。
(10分)	「保育士の役割とは何か」、「実習で学びたいことは何か」、「事前にやるべきこと何か」についてまとめる。	
5分	本時の内容を振り返り	・本時の内容をまとめ次回指導3へのつながりについて示す。 ・次回の場所、持ち物、服装などの指示。

表2 事前指導2回目指導案(児童養護施設)

平成28年度 保育実習Ⅰ(施設)事前指導2回目  
《実習先種別における特徴とポイント(児童養護施設・母子生活支援施設)》

目的	実習施設の概要をおさえた上で、施設の目的・支援における保育士の役割を学び、実習施設の概要を理解する。また、実習前にやるべきことについて把握する。	
内容	PPとテキストを用いて実習施設の概要について説明する。ワークシートへの記入やグループでの話し合いを通して実習施設における実習のイメージをつかむ。	
時間	具体的な学習内容	働きかけ等
5分	・出席の確認を受ける。 ・服装、髪型・持ち物(前回施設実習録)について点検を受ける。 ・本時の学習内容	・本時の目的・内容を的確に伝える。 ・資料配布
5分 40分	(1)説明及びワークシート記入。 配布資料と教科書を用いて実習施設の概要を説明し、適宜ワークシートの6項目について各自記入する。	・4～5人のグループにわかれて着席する(同種別同士)。 ・ワークシートの記入については適宜助言する。
40分 (10分)	(2)グループワーク。 ①インタビュー形式によるヒアリング(2人組)。 ・後半の3項目「保育士の役割とは何か」、「実習で学びたいことは何か」、「事前にやるべきこと何か」を質問項目とし、聞いたことをメモする。 ・一通り聞き終えたら交代する。	・グループワークの進行係としてリーダーを決める。
(10分)	②インタビュー内容の紹介(グループ:2人組×2または3)。 ・①で相手からヒアリングした内容を整理してグループで紹介。	
(20分)	③まとめの話し合い(グループ)。 「保育士の役割とは何か」、「実習で学びたいことは何か」、「事前にやるべきこと何か」についてまとめる。	・リーダーが司会進行し話し合いを進め、実習種別への関心が高まるように助言する。
5分	本時の内容を振り返り	・本時の内容をまとめ次回指導3へのつながりについて示す。 ・次回の場所、持ち物、服装などの指示。

表4 事前指導2回目指導案(福祉型障害児支援施設等)

平成28年度 保育実習Ⅰ(施設)事前指導2回目  
《実習先種別における特徴とポイント(福祉型障害児支援施設)》

目的	●実習する施設について学ぶ。 ●利用者にはどのような人がいるかを学ぶ。	
内容	●各施設の説明を受ける。 ●幼稚園実習と何が異なるかを考える。 ●利用者との関わり方について学ぶ。	
時間	具体的な学習内容	働きかけ等
10分	・出席の確認を受ける。 ・服装、髪型について点検を受ける。 ・本時の学習内容を知る。	・出席の確認をする。 ・服装について点検し、指導する。 ・本時の目的・内容を的確に伝える。
35分	1. 実習の種別について。 ●各施設の説明を受ける。 ●そこで行う施設実習の意義を考える。 ●資料配布。 2. 利用児者について。 ●各施設の利用児者の特徴について説明をうける。 ●コミュニケーションの重要性についての説明をうける。 ●考えられる問題、課題を理解する。 ●利用する施設と、「理由があってそこにいる」施設の違いを理解する。 ●なぜ施設で生活をしなければならないかについて理解する。 ●施設がなかったらどうなるかを考える。 ●他(多)職種連携(チームケア、専門職)との視点の違いについて考える。	基本的には教科書を参照させながら説明を行う。(但し、詳しい種別は教科書と配布資料を使用)。 必須事項として、 ●実習をよりよくするための心構えや具体的な行動を示す。 (例:非言語的コミュニケーションとは何か、対象年齢に合わせて言葉づかいや行動)。 ●この実習において、保育士としてどのようなものが身につくかを示す。 ●上記のようなものがない代わりに、「自分が障害や社会的困難がある人に対してどのような持てているか」という、自分自身の根拠にある部分がさらけ出される実習であることを伝える。
30分	3. グループワーク。 ●実習先が同じものが互いの意見を交わし、課題を認識できるようにする。	●認識の時間も含め30分。 ●意見を交わす、話をし、自分の意見を伝えることを促す。
10分	4. 施設実習で必要なことを知る。 ●自分の中で「差別」していないかを考える。 ●自分は相手をどうみているかを考える。 ●相手にどう接すればよいかを考える。 ●本当に人と関わる仕事ができるかを考える。	●こなすことが必要なのではなく、経験して、何を感じるかが必要であることを伝える。 ●コミュニケーションの重要性を認識させる。
5分	4. 本時の内容を振り返り、次回までの課題の解説を受ける。課題ワークシート配布と回収方法の指示をする。	●課題ワークシートを配布して早くから、課題ワークシートを回収することも合わせて伝える。

## 5 保育科における保育実習Ⅰ（施設）事後指導の概要

保育科の保育実習Ⅰ（施設）の事後指導は、3回である。

- 1回目 自己評価
- 2回目 レポート作成
- 3回目 発表

1回目は、まず、利用児者との関わりを通して学んだ場面（気になったり迷ったりした場面）を、ここではひとつ取り上げ、利用児者、実習生の自分そして職員の言葉や行動を振り返り、「保育者を目指すものとして、利用児者にどのように関わればよかったのか」をまとめる。次に、それをグループ内で話し合い、自他の考え方のちがいを受け入れることにより、多角的に物事を見る眼を養う。その後、実習先が行なう評価と同様の項目について、項目の説明を受けながら自己評価シートを記入し、実習時の自分を、全体的客観的に振り返る。

2回目は、前時に記入した自己評価シートを、実習の事前指導内で作成した実習の計画（『実習の目標と課題』のレポート）と見比べて、課題への取り組みに対する自己評価を伝え合い、共通点や異なる点についてグループで話し合う。このことを通して、自他の考えのちがいを認め、実習を肯定的に受けとめることを学ぶとともに、自己課題に気づくようにする。そして、目標がどの程度達成できたかという観点から、課題への取り組み状況を振り返り、学べたこと、学べなかったこと、明確になった自己課題（次の実習までに何を学び、何を身につければよいか。いまからできること、しなければならぬこと）について、ワークシートに整理して記入する。これらをもとに、『実習の成果と今後の課題』のレポートを作成する。このレポートは、訪問電話指導教員によって点検指導される。

3回目は、発表である。「聞き取りシート」を記入しながら、各人の実習体験の発表、質問を通して、施設実習で学ぶべきことは何だったのかを理解するとともに、今回の実習の体験を共有化し、次の実習につなげていく。これまでの実習事前・事後指導は、すべて実習先が同一種別によるグループわけをして指導を行ってきたが、最終3回目の事後指導においては、クラス別のグループ（40名程度）で行われる。すなわち、これまでは同一種別で実習体験の深化を主にはかかってきたのであるが、ここにおいては既知の人間関係が形成されているクラスの中で、多様な施設・種別の実習体験をも共有化し、保育者としてのこれからの

学びに、深さとともに幅を持たせようというものである。

概略以上のような事後指導を現在行っているが、課題は実習体験の深化である。これまでの調査では、学生の多くは「不安の中で始まった施設実習であるが、楽しく終えることができた」と肯定的にとらえられている。しかし「楽しかった」と、情緒的、表層的、主観的なレベルでのとらえ方にとどまっていることが多いように思われる。養護技術の習得などとともに、保育者として対人援助するとはどういうことなのかについての自覚なども深めるべきだと考える。もし自己評価を他者評価とつき合わせる事ができれば、新たな気づきを生むことが期待される。

社団法人全国保育士養成協議会の『保育実習指導のミニマムスタンダード』では、事後指導の大項目として「1実習内容を確認させる。2実習施設からの評価を知らせる。3今後の方向性を明確化する。」とあり、「2実習施設からの評価を知らせる。」の小項目では「実習施設からの評価を学生に知らせる。自己評価を行なわせ評価の“ずれ”を検討させる。」とある<sup>注3</sup>。

保育科の保育実習Ⅰ（施設）では、評価票を事前指導内で資料として配布し、実習中に自己評価、自己点検を行なうように指導している。そして、実習後の事後指導において実習体験の振り返りをする中で、評価票と同じ内容項目で自己評価を行っている。しかし、いまのところ評価票評価との照らし合わせ、「ずれ」を検討させることは行っていない。保育実習Ⅰ（施設）と次の保育実習Ⅰ（保育所）が近接しており、保育実習Ⅰ（施設）の評価票取りまとめは保育実習Ⅰ（施設）の事後指導の期間に間に合わないからである。保育実習Ⅰ（施設）の評価の開示は、事後指導とは別に、保育実習Ⅰ（保育所）の実習後に、評価の開示を申し込んだ希望学生に限って、施設実習委員会委員が個別指導として、評価の開示を行なっている。なお保育実習Ⅲを選択した学生に対しては、その事前指導内において保育実習Ⅰ（施設）の評価を開示し、保育実習Ⅲに生かすようにしている。

実習の連続性を考慮して、「学生の成長を促すこと」、「評価を受容して生かす」こと<sup>注4</sup>は重要なことであり、保育実習Ⅰ（施設）における評価票の開示による実習指導の方策を探っていきたい。

表5 事後指導 1 回目指導案

平成28年度 保育実習Ⅰ（施設）事後指導 1 回目  
《自己評価》

目的	<ul style="list-style-type: none"> <li>●自分が実習で得たものを目で見てわかるようにするため、レポート「実習の成果と今後の課題」にまとめる。</li> <li>●自他の考え方の違いを受け入れることにより多角的に物事を見る目を養う。</li> </ul>	
内容 自己評価	<ul style="list-style-type: none"> <li>●実習した内容を振り返り、肯定的に捉える力を身につけるための3回の事後指導の1回目。</li> <li>●実習した内容に対する自己評価を行う。</li> </ul>	
時間	具体的な学習内容	働きかけ等
10分	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出席の確認を受ける。</li> <li>・服装、髪型について点検を受ける。</li> <li>・本時の学習内容を知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・出席の確認をする。</li> <li>・服装について点検し、指導する。</li> <li>・本時の目的・内容を簡潔に伝える。</li> </ul>
40分	<p>【グループで話し合う】</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>① 各自で「自己評価シートⅠ」（以下シートⅠ）の1を記入する。（15分）</li> <li>② 5～6人一組の7グループ（40人の場合）で、実習の振り返りをする。（25分） シートⅠの2について、グループで話し合い、考え方の相違や利用児（者）との関係の構築について考える。</li> </ol>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気がなったり迷ったりした場面を抽出できるように促す。単なる思い出とは異なることを説明する。</li> <li>・自他の経験の共有を通して、共通点や異なる点を認識し、自己・他者理解につなげる。</li> <li>・気づきや考えは、レポートに反映できるよう、シートⅠに記入するように指示する。</li> </ul>
30分	<p>【個人で自己評価を行う】</p> <p>施設評価を視野に入れて、自己評価について「自己評価シートⅡ」（以下シートⅡ）に、説明を聞きながら記入する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実習先の評価との照合を促すうえで、実習の自己評価について説明する（※1、2）。</li> <li>※1 保育実習Ⅰの目標は、テキストp123にあるように、「施設での対児児（者）に対する日常生活援助活動に積極的に分かることを通じて、対児児（者）理解、施設の理解、保育士の職務理解に重点をおくことが求められ、～これらのことに留意した実習目標・達成課題を設定して実践することが最終的な評価につながっていきます。」（p123-11～16）。</li> <li>※2 「自分では最大限の努力をしていますが、最三章の評価とは食い違ってしまうことがあります。～向上心をもつことが望まれます。」（p123-27～29）。</li> <li>・一斉に進めるために項目を絞り上げるが、必要箇所には適宜解説を加える。</li> <li>・シートⅡについては、今後の施設実習の指導内容の参考とするため、3回目の実習指導時にコピーを提出することを伝える。</li> </ul>
10分	次回の予告。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・次回は、事後の挨拶時に持参するレポートを作成して、授業内で発表する。そのため、今回の「シートⅠ」と「シートⅡ」、事前学習で作成した「実習の目標と課題」を必ず持参するように伝える。</li> </ul>

例えば、一般的な保育士養成校では「社会福祉」という科目は1年次に開講されることが多いが、1年次終了後の2月より保育実習Ⅰ（施設）が行われる本学保育科では、それまでに保育実習Ⅰ（施設）を行うにあたり、必要な科目を学修しておく必要がある。従って、「社会的養護」、「社会的養護内容」など、実習を行うにあたって特に必要な知識を教授する科目を1年次に開講している。しかし、実習を行っていない段階で「社会的養護内容」などを履修することは、実習の経験をふまえないで考えなければならないこととなり、DVDなどの教材を積極的に用いるなど工夫が求められるところである。

このように実習をコアにしたカリキュラムマップに基づいた科目編成は、まさに実習を中心とした科目編成への取り組みといえる。実学として保育をとらえても、おそらくこの取り組みは1つの指標になるだろう。

さて、本学保育科で「幼稚園教諭二種免許」、「保育士資格」の2つの免許資格を取るために必要な実習は見学実習を除けば5つある。学生が最初に経験する実習は「幼児教育実習（附属幼稚園）」である。幸いにも本学には7つの幼稚園が同法人内にあり、そのうち、本学保育科が所在する千葉県内の4つの附属幼稚園で実習を行う。これについては、当然厳正な指導が行われるものの、同一法人内ということもあり、教員と幼稚園との連携も取りやすいものとなっている。

本格的に外部の実習となると、1年次の講義等がすべて終了した2月～3月に行われる「保育実習Ⅰ（施設）」ということになる。保育実習は保育士になるための実習であり、その実習の最初が保育実習Ⅰ（施設）となる。ここで考えなければならないことは、学生が「保育士になるために施設での実習の必要性を認識しないで入学している」ことである<sup>注5</sup>。佐伯はこれを「保育所における保育士」像が先行しがちな学生<sup>ii</sup>と評している。この傾向は保育士養成課程のほとんどで見られる現象であろう。さらに、実習先として学生の半数近くが「障害者支援施設」での実習が行われるということも、学生が戸惑う点であろう。例えば、平成29年2月より実習が行われる本学保育科学生261名のうち、112名が障害者支援施設での実習を行うこととなっている。この状態で保育実習Ⅰ（施設）を行うとなると、保育実習Ⅰ（施設）に対するモチベーション、学ぶ意欲に問題が発生することは想像に難くない。従って、学生に対し、「なぜ保育実習Ⅰ（施設）を行うのか?」「保育実習Ⅰ（施設）で何を学ぶのか?」を提示することが求められるのである。

例として、障害者支援施設の考え方をもとに論じる。障

## 6 本学における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけとあり方に関する考察

本学保育科では、平成25年度より実習をコアにしたカリキュラムマップを作成し、科目の開講年次などについて、実習に沿った時期に編成するなどの改革に努めてきた（表6参照）。

表6 実習をコアにした本学保育科カリキュラムマップの一部（筆者一部修正）



害者支援施設での実習では何が行われているかを見ると、基本的には「個別支援」が中心となっている。簡単に言えば、利用者の方と行動、日程、プログラムを共に過ごす中で、関わりをもち、関係性を構築する方法を学んでいくことが中心となる。その中で、これまでの自分自身では考えもしなかった、あるいは関わりが少なかった障害というものを考え、それに対して自分自身の価値観、障害観などに「ゆらぎ」を感じる事が重要である。言い換えれば障害がある利用者の方について戸惑い、その中で自分が何をなし、何をすべきかを考える実習となっていることがわかる。また、男性職員の多さも特徴としてあり、その職員が、社会福祉士や、介護福祉士など他職種であれば、その視点の相違に気付くこともできると考えられる。

このような現状を考えると、保育士になるための実習として保育実習Ⅰ（施設）を位置付けるだけでは、保育実習Ⅰ（施設）の意味について弱い動機付けにしかならない。「たのしかった」「2回目も施設が良かった」などという短絡的思考による満足度の高さだけが目立つことになることも考えられる。したがって、本学保育科として、世間的イメージとしては保育士の実習から離れたところにある保育実習Ⅰ（施設）を「人と関わるということとはどのようなことかを考える」ということを主眼とした「基礎的実習」と位置づけることが必要であると考え（表7参照）。

表7 本学保育科における保育実習Ⅰ（施設）の位置づけの概念図



この位置づけによれば、それぞれの実習がどのような意味を持ち、自分が今何を学び、何を学修しなければならないかを考える一助ともなる。さらに、実習をコアにしたカリキュラムマップに基づいて、実習と講義科目に連帯が生まれ、一連の授業、講義が実習と繋がっていると考えることができる。

## 7 まとめ

今回の論文の限界として、保育実習Ⅰ（施設）のみを取り上げている点がある。したがって保育実習Ⅰ（保育所）や保育実習Ⅱ・Ⅲの実習との整合性の部分は論じられていない。これらは今後の課題として残るものである。

また附属幼稚園実習について、全体の位置づけをとらえるという流れの中で、どう位置づけるべきかは、学科、ならびに実習全体、ひいては附属幼稚園を含めて捉えるべき課題であり、本研究では考察できなかった。

一方で、保育実習Ⅰ（施設）をどうとらえるかによって、保育士養成課程における施設実習の位置づけが明確となることは明らかとなった。その成果として、前述の表7のような概念図の提示があげられる。この概念図をもとにして考えれば、まず保育士が単なる子どもと関わる仕事ではないということが明確となる。そのベースには対人援助という考え方がなければならぬということがわかる。また、保育実習Ⅰ（施設）の位置づけができたことにより、施設実習が実施させるまでの間、講義科目等で何を教授すればよいかを反映することができる。これこそが「実習をコアにしたカリキュラム」といえるのではないだろうか。

実習は保育者養成の核になるものである。その充実はより良い保育者を社会に送り出す養成校の使命である。今回の論文は、その中でも特異な存在である施設実習に焦点をあて位置づけを考え、概念図を提示したところに成果があるものと考えている。

## 注

注1 第1回日本保育者養成教育学会 プログラム 2017 p11

注2 寺田博行, 大野地平, 海老江康二, 宮本茂樹 「保育実習Ⅰ（施設）における学生の自己評価と実習先評価の比較：児童養護施設を中心として」聖徳の教え育む技法（10）2015 p 77-91 及び 大野地平, 寺田博行, 海老江康二, 宮本茂樹「保育実習指導（施設）の現状と課題：保育実習Ⅰ（施設）における実習評価を手掛かりとして」聖徳の教え育む技法（9）2014 p161-177

注2 寺田博行, 大野地平, 海老江康二, 宮本茂樹 「保育実習Ⅰ（施設）における種別間での学生意識の差異について：児童養護施設と障害者支援施設を中心として」聖徳の教え育む技法（8）2013 p95-106

注3 全国保育士養成協議会「保育実習指導のミニマムスタンダード p64

注4 同上 p72-75

注5 寺田博行, 大野地平, 海老江康二, 宮本茂樹「施設

実習における現状と課題 -- 知的障害児施設での実習を中心として」聖徳の教え育む技法（5）2010 p157-167  
及び 大野地平, 寺田博行, 海老江康二, 宮本茂樹 「施設実習における現状と課題 -- 児童養護施設での実習を中心として」  
聖徳の教え育む技法（4）2009 227-237

## 引用文献

- i 社団法人全国保育士養成協議会編『厚生労働省関東信越厚生局「指定保育士養成施設関係」会議資料[平成18年度第2回連絡会議]』社団法人全国保育士養成協議会,2007,p.45
- ii 佐伯知子 施設実習における学生の「学び」—実習感想文より—. 大阪総合保育大学紀要（3）2008. pp169-178

## 参考文献

- 岡本幹彦、神戸賢次、喜多一憲、児玉俊郎 編 「保育士養成課程 四訂 福祉施設実習ハンドブック」 株式会社みらい 2013
- 全国保育士養成協議会 編 「保育実習指導のミニマムスタンダード」 北大路書房 2007